



妊娠とお薬

おなかの赤ちゃんへの薬の影響は、多く場合は心配はないのですが、注意が必要な場合もあります。妊娠中は、薬は飲まないに越したことはありません。

薬の影響は、「薬の性質」「薬を使った期間」「薬の量」「薬のタイプ(例えば、飲み薬か、塗り薬かなど)」「薬の種類」のほか、個人の体質・持病などによって違ってきます。

もっとも重要なポイントは「薬を使用した時期(妊娠何週目だったか)」です。

<妊娠の時期と薬の影響>

薬の影響が最も出やすいのは、妊娠初期(最終月経日より4週目～7週目まで)ですが、この時期では妊娠していることに気付いていない人が多く、いつも通りに薬を服用していることがあります。

月数	妊娠初期 (絶対過敏期)				(相対過敏期)					妊娠中期	妊娠末期							
	1ヶ月		2ヶ月		3ヶ月		4ヶ月											
週数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16～27	28～39
赤ちゃんの発育	細胞が増殖する				体の形や臓器(脳、心臓、胃腸、手足など)が作られる											体が成長する		
薬の影響度	基本的に薬の影響を受けず				薬の服用は慎重に(特に2ヶ月目)											一部の薬は赤ちゃんの成長に影響を及ぼす		

* 妊娠週数の数え方

最後の月経が始まった日を0週0日とし、0週6日の次が、1週0日になります。最初の4週間(28日)を妊娠1ヶ月と数えます。実際に排卵して受精するのは2週0日になります。分娩は、280日目前後に起こります。

薬を服用・使用する基本的な考え方

- ・ できるだけ少ない種類(できれば1剤)で、必要量をなるべく短期間にとどめるようにします。
- ・ 飲み薬よりも、外用薬(塗り薬、湿布薬、点眼薬、吸入薬)は、局所に作用するので安全です。



妊娠中にかかりやすい病気とその薬

- ・ **虫歯、歯周病**: つわりの時期が過ぎたら歯医者さんに行って、歯と歯ぐきを診てもらいましょう。妊娠中期(5～7ヶ月)では、普通に鎮痛薬や抗生物質が処方してもらえます。
- ・ **便秘**: 黄体ホルモンの影響で腸の働きが低下します。便を軟らかくしたり、排便を促す薬: ピコスルファートNa、ビサコジル、酸化マグネシウム
- ・ **痔**: 便秘による無理な排便と大きくなった子宮の圧迫による血行不良で、肛門周辺がうっ血。飲み薬よりも、肛門内に注入する形の軟膏がおすすめです。円座も利用しましょう。
- ・ **風邪**: 発熱、咳は、体力を消耗します。早めに薬を飲みましょう。鎮痛・解熱剤: アセトアミノフェン 咳止め: デキストロメトルファン 鼻水止め: クロルフェニラミン



<普段から薬を飲んでいる方は…>

- ・ 糖尿病、てんかん、喘息、心疾患など慢性疾患で薬を継続して飲んでいる方で妊娠を希望されている場合は、事前に医師に薬についてご相談するとよいと思います。自己判断で薬を中止してはいけません。薬を止めることのほうが赤ちゃんに与える影響が大きい場合があるからです。
- ・ 妊娠中の個々の薬について心配がある場合は、担当の医師もしくは薬剤師にご相談してください。
- ・ 妊娠中は、葉酸が不足しがちです。サプリメントで補いましょう(妊娠4週間前～12週)。